●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 40

40th Letter

観聴寺の月待供養伝説

伝説そぞろ歩き

二十三夜
下弦の月に
願い事
末摘花添え
月待供養

月に願い事をする民間信仰
神とともに夜を明かす風習

観聴寺は、元和年間（1615～24年）に伝馬町の正覚寺第16世空山存宅が創建したといわれています。天保3年（1832年）から尼寺となっています。もともと旗屋町の断夫山古墳東側にありましたが、昭和17年(1942年)に熱田神宮公園建設に伴い、現在地に移されました。本堂に二体の鉄地蔵菩薩立像（ともに県文化財）が安置されています。背面の刻文から、当時、尾張で鋳造の特権を独占していた上野太郎左衛門範家（のりいえ）が享禄4年（1531年）11月24日に鋳造したことが分かります。

観聴寺でもう一つ必見なのが、境内に並んでいる3基の月待供養碑。市の文化財に指定されています。

3基中、1基目には「文禄5年（1596年）9月23日」、2基目には「寛永7年（1630年）仲冬23日」、3基目には「寛永16年（1639年）11月23日　正保4年（1647年）11月23日」の年号がそれぞれ刻銘されています。仲冬とは11月のこと、正保4年は追銘されたものです。

月待供養は、室町時代から江戸時代にかけて一般庶民の間で行われていた民間信仰で、月の光を清浄なものとし、真摯に月を迎えて願い事をする行事です。旧暦の霜月（11月）23日に行われていました。また、1年のうち、正月、5月、11月の23日と3回にわたって行われた地方もあったようです。月待のことを俗に「二十三夜様」といい、23日の月は「下弦の月」とも呼ばれていて、半月となります。

いずれにしても、田植えや収穫が終わった農閑期に、仲間が集まって夜通し起きたままで神を迎える行事です。「待」とは「おそばにいる」を意味し、神とともに夜を明かす風習となっていたようで、当時の人たちの真摯な信仰心が伝わってきます。

アルテミスは永遠の乙女
彼女の裸身を見た者の運命は

月の神に願い事をする話でしたが、ギリシャ神話で月の女神といえば、アルテミス。ゼウスとレトの間に生まれた双子のうちの一人で、双子の兄が太陽神・アポロンです。兄・アポロンが太陽神として昼を司るのに対して、妹・アルテミスは月の女神として夜を司り、一日を二人で分け合う仲なのです。

もともと月を司っていたのはセレネという女神で、アルテミスは魔法を操る女神でした。ところが、時が経つにつれ、魔法の怪しい魅力を、日々その形を変える変幻自在な月と結びつける信仰が生まれ、いつしかセレネとアルテミスは同一化されるようになっていったのです。また、三日月の形状が弓に似ていることから、彼女は狩りの名手としても崇められていて、狩猟の女神でもありました。

アルテミスは「決して結婚しない永遠の乙女の女神」であり、潔癖なアルテミスの裸身を見た人間には罰が下されることになっていました。

ある日、若い狩人のアクタイオンが狩りを終え、木陰で休もうとさまよううち、神秘の森に迷い込んでしまいます。しかし、その場所にはアルテミスが沐浴をする泉があり、アクタイオンは泉の水で喉の乾きを潤そうと泉に近づき、知らず知らずのうちに沐浴するアルテミスの透き通るように白く輝く裸身を見てしまったのです。

アクタイオンの視線に気がついたアルテミスは激怒して、魔力によってアクタイオンを鹿に変えてしまいました。そして、森を逃げ惑ううちに、自分が連れていた猟犬たちに囲まれ、獲物として食いちぎられ、命を落としてしまったのです。

また、アルテミスは、ローマ神話ではローマ古来の森の女神と同一視されるようになり、ダイアナとも呼ばれるようになっています。

今宵、月を眺めながらアルテミスに思いを馳せてみるのも一興です。

▲ 観聴寺の境内に並んでいる3基の月待供養碑。

※次回は、一番観音伝説を特集します。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei　■ 取材・文／Icarus